魅力ある大会とは？

村越　真

大会の魅力を高めるために

オリエンテーリング大会の参加者が減っている。首都圏で東京から十分日帰りも可能な東日本大会の参加者が６００人、富山の全日本リレーに至っては４００人であった。アクセスもよく、過去の評価も高い多摩オリエンテーリングの大会が９００人。かつてのような１万人はおろか、１０００人のオリエンティアを集める大会すら幻のものとなりつつある。

大会参加者が減少してしまったのはなぜだろう。新規オリエンティアの最大の供給源である大学クラブの衰退、他のスポーツやアウトドア活動との愛好者の食い合いなど、さまざまな要因が考えられる。一部根強いファンを持つ大会、運営母体はある。しかし、オリエンテーリング界全体として、オリエンテーリング愛好者を増やし、大会の魅力を高める努力が不足しているのではないだろうか。

本レポートでは、大会の魅力とは何か、またどうしたら参加者を惹きつける大会ができるのか、またオリエンティア以外を引き込むにはどうしたらいいかを、読者からのコメントなども交えて検討していきたい。またそこから、今後のオリエンテーリングのあるべき方向性についても探っていきたい。

大会の魅力とは？

入間市ＯＬＣでは、毎年４月上旬に「入間オリエンテーリングカーニバル」を開催している。このカーニバルは名ばかりのものではない。入間市の青年会議所の協賛を得て、会場ではさまざまなニュースポーツが体験できたり、屋台で焼き鳥や山菜のてんぷらを買って会場で飲食ができたりする。文字通りのカーニバルである。一方シリアスな競技者に対しても、毎年インカレと全日本選手権の優勝者を招待するというアピールを続けている。この入間 OLC の会長である田中博氏は、魅力ある大会について次のように指摘する。

「①主催者の意欲が感じられる大会：参加者に楽しんでもらおうという意気込みが感じられ、うちの大会はこんな大会にしたいという主張のある大会 ②テレインの良い大会：地図が正確だろうと期待できる主催者の大会　③参加者の多い大会：同じクラスに出場者が少ないとつまらない。現在の大会のなかで①と②の両面で最も劣っているのが　東日本西日本の公認大会ではないでしょうか？大学及び地域クラブの主催大会は、その大会がつまらないものだと参加者の減少となって表れ、大会の存続問題になってくるので各クラブはそれぞれ工夫をこらします。クラブカップリレーがあれだけ多くの参加者を集める大会に成長したのは（成績表の発行の遅さ　役員数の少なさによる若干の運営の不手際にもかかわらず）上記の条件を満たしているからと思います。それにひきかえ公認大会の参加者の減少はひどいものです。高い、つまらない。役員はなれてない、なんとか無事に早く大会が終わってくれればいい、という態度の役員がままみられる。このような公認大会（JOA主管（ママ）の）を変えなければいけません。今後益々赤字の大会となり引き受ける県がなくなるでしょう。」

自分たちが、魅力ある大会に対する努力を続けているだけあって、努力のない大会に対する指摘は辛らつである。確かに、東西全日本大会は、「とにかく年中行事だからやればいい」という大会になりやすいことは事実である。このような姿勢を「お役所的」と呼ぶのは、現代のサービス意識に目覚め始めた行政に対して失礼である。JOA 主催の一部大会は行政以上に「お役所的」な運営となっているのである。

ＪＯＡ主催大会が「お役所的」になってしまう原因はさまざまである。ＪＯＡに大会を魅力あるものにする姿勢、大会の魅力を高めるための試みを受け入れていこうとする姿勢が足りないことは、大きな原因だ。主管者としての経験からすれば、大会の魅力を高める提案・努力の多くが「来年度以降も保証できない」「これまでやっていないから」といった消極的な理由で不採用になってしまうのだ。

しかし、主管協会として努力の余地がないわけではない。たとえば昨年度の東日本（山形県）では、これまでの慣例を破って表彰式を行い、一部賞品を提供している。オリエンテーリング大会では、表彰式を滞りなく行うことは容易なことではないが、全日本では毎年行っていることであり、できないことではない。常勝の選手ならともかく、初めて入賞した選手、ジュニアなどにとって、自分がせっかく好成績を上げた大会で表彰式がないことはそれだけで、大会の魅力が減ってしまう。かの世界チャンピオンペッテル・トゥールセン（ノルウェー）ですら、「１２歳の時出場した大会でトロフィーをもらった。それからオリエンテーリングに対してやる気がでた」と言っている。がんばったものに対するごほうび、それは大会の無視できない魅力の一つであろう。

魅力あふれた、今年度の東日本

今年度の東日本でも、大会の魅力を高める多くの工夫が行われた。この大会で中心的な役割を果たしている津金沢さんは、この大会について、次のように語っている。

「群馬県で本大会を引き受けるのにあたり、いかに大会の質を上げ”魅せるＯＬ”とすることが出来るかに目標を置き、これの実現に向けた大会運営を目指して参りました。 その根底には、１９９７年（平成9年）に前橋ＯＬＣ・杏友会共催の「赤城・榛名３日間大会」でみせた、走者と観客が一体となって大会を楽しませようという大西淳一さん

の心憎いまでの見事な演出に激しい衝撃を受け、これからのＯＬ大会のあり方を強く感じたことにあります。その後のインカレ等でもこの流れが踏襲され、ＲＯＭサービス、チーム白樺等限られた人たちが繰り出す大会であっても、いつもＯＬが堪能できるため、公認大会以上の参加者があるのは、皆様ご存じの通りです。

大会は「質さえ良ければ参加者を増やすことは十分可能だ！！」という思いが常にあり、これからは質の勝負であり、弱小地方県協会でもやり方次第で全国に肩を並べられる大会が出来ると信じて大会運営に臨みました。 更にまた、私有地が多いうえ、行政等数多くの関係機関との調整や地域の人たちの同意を得る中で、いかにＯＬが愛好者以外のその土地土地の人たちに認知され受け入れられるかも大きな課題だと思っていました。初めての大会地では、ＯＬがどういうモノか解らないうちに大会が終了するわけですから、地元は”結果”のみが評価の対象であり、何をその地にもたらしたかが大切なのです。 ＯＬ界だけのマスターベーションでは、何れは地域から見放され、ＯＬそのものが立ち至らなくなっていきますので、大会を通して如何に地域に貢献できるかも大きな課題でありました。

「競技は参加者を優先し、それ以外は地元を優先しよう！！」 そんなことを念頭に置いて運営にあたりました。」

東日本大会では、大会の質を向上させるために、競技部門は若者中心、渉外は年輩者と、それぞれ得意分野を受け持ち、柔軟な発想を取り入れるような環境を整えたこと、ROMサービスを活用し、地図調整や速報関係の処理を確実なものにしたこと、県内外の現役・ＯＢ学生オリエンティアの協力を仰ぎ、地図調査や準備を確実なものにしたこと、などの工夫を行っている。

競技部門は若者中心とは言っても、年輩者も積極的な支援を忘れてはいない。東日本大会では、群馬県関連大会でおなじみのリザルトステージが設置された。これら資材のほとんどは、菊さんこと高橋菊太郎さんが大会毎に改善してきたものである。彼の自宅は、ＯＬ資材のために資材庫があるようなものだし、ＯＬ資材運びだけのために軽トラックを保有している。常設コントロールポストもパンチ台も、速報ボードも全て菊さん手作りである。もう一人忘れてならないのは、「安中ＯＬワン」こと金井一氏（安中市在住）である。東日本の賞品の一つである”磯部煎餅”の提供者である。金井さんは定年間際にＯＬを始め、あらゆる大会に出場していて、年間出場回数は群馬県内では他の追随を許さない。金井さんは、大会運営の大変さを誰よりも理解している人で、全国の人にお世話になったお礼がしたいという思いから、自腹でこの賞品を提供しているのである。

津金沢さんは、大会開催において重要なもう一つの点として、対外アピールを強調する。

「今回の大きな狙いの１つとして、如何にＯＬを外部に発信するかがありました。最近盛んに行われるようになったパークＯ同様、人の出入りの多いテーマパークを選んだのも その為です。会場が狭い上、万一の雨天を考えれば学校利用が最善ではありましたが、横川駅前と碓氷峠鉄道文化むらに隣接することで、外部の人にアピールしたかったのです。」 松井田町横川は、中山道の宿場町として、またアプト式鉄道の発着基地として、近年まで賑わいをみせていましたが、信越線廃止や上信越高速道路の開通に伴って一挙に寂れてしまいました。鉄道廃止の代替えとしてテーマパークを建設し活路を見い出そうとしております。こうした松井田町の思いの一端を、大会開催という形でお手伝いが出来ればと思っておりましたので、峠の釜飯や片田舎ではありますが食堂等の利用がしていただけたらと、あえて主管者が食事販売はいたしませんでした。」と、地元と共存し、地元にもメリットとなる大会開催の必要性を指摘する。

このような柔軟な発想と、それを実現させる行動力が魅力ある大会には欠かせないのだろう。

参加者の感じる魅力とは？

参加者サイドはどんな大会に魅力を感じているのだろう。どんな地方大会でも遠征する自称「悪食」の竹沢聡さんは、昨年参加した大会で魅力を感じた大会として、３月のインカレ、５月の長野県協会大会、６月の宇都宮大学演習林での大会、８月のトータス、10月の高遠青年の家大会を挙げている。インカレを除くといずれも競技性は高くない。むしろ企画性の高い大会に魅力を感じているようである。このあたりの魅力の感じ方は、競技性の高くない一般オリエンティアに多少なりとも共通しているものかもしれない。

ＩＯＦコングレス時に併設されたパークＯ大会。フィニッシュ・スタートは街中に設定され、そのそばには巨大なスクリーンで、競技中の選手の様子を放映している。魅力ある大会のモデルを提供した。

オリエンテーリング愛好者の少ない北海道でパークOをはじめとした大会を企画・実行している信原さんは、魅力ある大会として、「フットに限って言えば、大会そのものに魅力を感じた大会は、夏合宿のセレクションとインカレくらいでしょうか。大会の中に魅力を持たせると言えば、その大会の独特な雰囲気というもの以外ではないのではないでしょうか？逆に言えば、他の大会とは違う独自性を持った大会は、参加者に魅力を感じさせられると思います。たとえばリレー、インカレのリレーや、クラブ対抗リレー、全日本リレーなどそれぞれには無い要素を持っています。

また、私はフットよりスキーOやMＴＢ－Oを中心に考えていますし、大沼公園のボートOなど大きな魅力でした。やはり、その大会の売りを持つことが重要だと思います。ひそかに少数派の中で「アットホームな雰囲気なのに、参加者レベルの高い大会」として知られていた岩手大学大会も独特の雰囲気を毎年出していました。参加者の多くは顔見知りで、大会に参加すれば友人に会える。そして大会参加費も安い（だいたい事前１５００円程度？）そんな程度の大会ですが、参加者には入江さんや松澤さんが含まれ、優勝するのは非常に難しい大会だったようです。（まだ参加したこと無いのでわかりません）。また多くの参加者は帰りに盛岡三大麺（じゃじゃ麺、冷麺、わんこそば）を毎年一種類ずつ食べていくので、３年連続でよく参加してくれていた方が多かったです。これも魅力でしょうか？」と言う。

競技志向の高い選手の大会選択基準は異なっている。ヨーロッパ遠征の前日は札幌で北大大会、と大会出場のために世界を飛び歩いているウルトラクラブの奥村さんは、大会を選択する基準として、次のポイントを挙げる。1)エリートポイント(EP、来年から日本ランキング)対象大会、２）その他の定期的に開かれるもの(たとえば、元朝 OL、３月のインカレ、隔年春～秋にあるワールドカップ、隔年夏の世界選手権、秋のインカレショート、３）国内で今まで自分が走ったことのないテレインでの大会である。つまり、EP 対象というのが高いモチベーションの源になっているのである。本年の千葉大大会では、例年通り EP 対象になるだろうと何の疑いもなくエントリーしたが、指定されないと知って困惑し、結局「釈迦谷は魅力的だけど、如何せん遠い。そこにきて同じ日に近場の愛知で ASK 大会(しかも走ったことのないテレイン)がある。3 位まで表彰で賞品も出ると要項に書いてある」、ということでＡＳＫ大会(愛知)を選んでいる。

参加者のニーズは多様である。それに応える魅力ある大会づくりに近道はない。競技的に一定のレベルを維持することは重要だ。だが、それだけでは魅力ある大会にはならない。参加者が求める＋αに対する敏感さと、常に自分たち自身がおもしろさを追及する意欲が必要だ。田中氏が言うように、魅力ある大会とは主張のある大会である。そこでは、運営者が参加者の要求に応えるために汲々としている訳でもなく、義務感でやっている訳でもない。「こんな大会があったらいいな」「こんなレースに出てみたい」そういう思いが、大会の魅力を高めている。自分はどんな大会に魅力を感じるのだろうか？運営者になった時にも、そういう視点を持ち続けることが重要だ。

魅力を高め、参加者を増やす

参加者は増やせるのか、オリエンテーリング界全体としてみた時、この点に対して、信原さんは、否定的な感想をもらしている。

「まず、大会参加者を増やすということに対して、全体的に手詰まりになっていると同時に、その努力と手間をかけなくなり、あきらめの雰囲気が流れているように感じています。以前は大会運営費も高く、あの小さな岩手大学大会ですら、私が部長だった第１５回大会は１５０名の参加で総収入２５万程度、総支出３０万程度でした。地図とＣＣの印刷だけで１６万もかかりました。だから必死になって参加者を集めたものです。しかし近年は、ＣＭａｐの導入で、地図の印刷費用は半額近くになっています。大会参加者をたくさん集めなくても、採算が取れるようになってきました。そこで大会参加者を集める努力が欠けてきているように思います。」

確かに、オリエンテーリング界には閉塞感が漂っている。だが、十分な努力をする前に無力感に陥るのもどうかと思う。４月に行われたワールドカップ静岡大会では、併設大会やトリムの集客は十分とは言えなかった。特に地元からのトリム参加に関しては雨という悪条件があった訳だが、それ以前にも地元への日頃のＰＲが少なかったことも事実だ。まだまだ、やるべきこと、できることはあると思う。

大会参加者を増やすという点で重要な鍵を握るのが学生である。公認大会に限っていえば、学生の参加者は大きく後退している。その理由を、元学連技術委員長であった羽鳥和重さんは次のように分析している。

「もはや、学生は地区セレクション指定レースでなければ、大挙として大会に出ることはございません。多くの社会人オリエンティアが疑問に思っていますが、公認大会が１０００人達しない理由は正にそれです。それから一般大会に、学生はセレクション用コース（クラス）すら、作ってもらっています。そんなの、学生の勝手かもしれませんが、そもそもオリエンテーリングという競技自体、年齢、性別、レベルに応じたカテゴリで競うスポーツだというのが大原則のはずです。だから、公認大会は、値段が高いしセレ指定レースになるはずもないから、普通の学生は、エントリーを回避します。高い金払って出るわけありません。

そうなると、どうなるか！？、オリエンテーリングを始めた学生は、

本当に極端な話、その活動ほとんどを内輪の練習会、合宿、学生の対抗戦で過ごし、たまの大会は、地区や大学のセレクション指定レースでやはり同じ地区学連の顔ぶれでやって、インカレがあって、はい終わりです。１９Ａとか２１Ａとか走らずに。オジサンと競うこともない。学生ＯＬ界で、すべて帰結してしまっているのです。とにかく、一般のオリエンテーリング大会で、セレクションクラスなど、まず止めさせるべきでしょう。

こんな環境でＯＬやっているふつうの大学生が、どうして卒業後にオリエンテーリングを社会人クラブに入っていってやろうと思うでしょうか。」

学生クラブは、新規オリエンティアの巨大な供給源となっている。その意味で、オリエンテーリング界の将来を握る存在である。その大学クラブとその加盟員がそれ以外のオリエンテーリングの世界とは乖離する傾向にある。ここには、大会参加者数減少に限らない日本のオリエンテーリング界の大きな課題があるといえるかもしれない。

大会参加者は多くなければならないか？

大会参加者数は多くなければならないか？この点を問い直してみることも有意義だろう。たとえばアメリカである。選手権などの重要な大会を除くと、大会の多くは既存の地図を使い、せいぜい３～４００人の参加者の大会である。旧来大会会計の大きな部分を地図作成が占める。既存の地図を使う大会であれば３～４００人の参加者でも十分収支が成り立つのである。今でも多くのクラブに、「地図は自分たちでつくるもの」「参加者はニューマップでなければ満足しない」という信仰のごときものがあるのではないか。しかし、いずれの命題も、むしろグローバル・スタンダードではなくローカルスタンダードであり、世界的に見ても例外である。こういうあたりまえのように思っている基準から考えなおしてみれば、参加者数が少ないことは必ずしもデメリットとはいえないのではないだろうか。

環境的に見ても文化的に見てもオリエンテーリングは、数を問題にする限り日本ではマイナースポーツから抜け出すことは不可能だろう。だが、参加者が少なくても社会の認知度の高いスポーツはある。トライアスロンだって、ノルディック複合だって、競技者層という点では決してメジャーではない。複合など、ひょっとするとオリエンテーリングよりも競技者人口は少ないかもしれない。信原さんは、こう指摘する。

「具体的な例（ただし的確どうかは・・・）として、トライアスロンをあげるなら、今一般人でスポーツに興味のある人ならトライアスロンを知っている人は大勢いるでしょう。ところが、経験したことのある人は、ほとんどいないのではないでしょうか？また、初対面の人と挨拶を交わして、「スポーツは何をされていますか？」と聞かれて、「トライアスロンです」と答えたときと、「オリエンテーリングです」と答えたときでは、相手の反応がぜんぜん違うでしょう。つまり、経験したことがない、観戦すらしたこともないのに、知っているスポーツというのは意外とたくさんあるものです。

４００人や６００人が多いか少ないかを問うよりも、その４００人、６００人がどんな満足感を得て大会を終えたか、大会を開催することが、オリエンティアにとっても地元にとっても将来につながる何かを残し得たか、そういう質的な面からの検討が必要だ。

愛好者であることに胸を張れるスポーツに

オリエンテーリング愛好者の少ない北海道で、普及のためにさまざまなオリエンテーリングを企画している信原さんは、オリエンテーリングをする人を増やす努力と同時に、オリエンテーリングを知っている人を増やす努力がまず重要だと指摘する。

「北海道・東北のマイナー度はひどいです。岩手県にいて、調査中に一般人に会って、「何をしてるんですか」と聞かれて、オリエンテーリングを知っていた人は今まで１人しか会ったことがありません。岩手大学では調査中に山の中で人に会うと、説明が面倒、かつ怪しまれる（一名、不審者として警察に通報されそうになったものもいます）ので、「大学の研究室の地質調査で」と言うことが多かったです。また、部員の中にはオリエンテーリング部に所属していることを言うと説明しなければならないという理由で、大学構内ではオリエンテーリング部であることを隠しているものもいました。

私はせめて、胸を張って「オリエンテーリングをしています。」と言えるような知名度を持ってほしいと思っています。そのことが、大会参加者（一般人）の増加に繋がると考えています。

オリエンテーリングのアピールが難しく、一般の大会同様に、決まったオリエンティアが参加するだけで、一般人の目にとまるには、もう一工夫必要であると感じているところです。やはりオリエンテーリングのアピールという点では長野県の木村さんが提唱する、「企画するのではなく、企画されたものの中に入ってオリエンテーリングを展開する」という方向性は、良い案だと思います。道協会でも来年度のパークＯの一つを、「東区民健康祭り」の中に取り入れたいと考えています。」

大会参加者現象は危機的状況の現れの一つにすぎない。オリエンテーリングの現状に対して危機意識を持つ人は、少しづつだが増えている。だが、危機を危機とだけ捉えるのではなく、一種のチャレンジと捉える発想も重要だろう。ＲＰＧのごとく、危機を乗り越えれば一段と経験値がアップしたオリエンテーリングになれるのではないだろうか。